

備考	本時の学習指導計画				本時の目標	単元の指導計画	年間指導計画における位置付け	評価観点と評価規準	単元の目標	指導事項	単元名	科目名	指導領域	指導者
	まとめ	展開	導入	過程								国語	和歌の世界	「読むこと」
	次時の確認と予告	月と古人との関わりについて考える。	和歌の読解	指導内容	三年必修札より、「秋風にたなびく雲の絶え間より」「天の原ふりさけ見れば春日なる」「朝ぼらけ有明の月と見るまで下」の二首を学習する。二首を確認する。	本校では毎年一月に「小倉百人一首かるた大会」を行っている。その大会に向けて、学年ごとに必修札を決め、十一月ごろから和歌の解釈や暗唱などを授業で行い、古文に親しませるようになっている。一年から二年までに六十一首を学習しており、二年では百首全部を学習することになる。最終年として、古文に親しむとともに、和歌を味わうことができるようにさせた。	一時間目 二時～三時間目 四時間目 五時～九時間目 十時間目 十一時間目	「関心・意欲・態度」…積極的に考えたり、発言したりすることができたか。 「読む力」…和歌の調子を整えて読むことができたか。 「知識・理解」…各歌の大意や歌人の心情を理解することができたか。	「音読や暗唱を通して、和歌に親しむ。」 ・表現上の特色に注意しながら和歌を味わわせる。 ・枕詞、序詞、掛詞、縁語、比喩などの修辭法の働きを理解させる。	和歌の世界	「教科書名」 「教材名」	千田 加代子		
	次の時間は「月」をテーマにした短歌を創作することを告げる。	確認の意味で説明する。 月と古人、和歌とのつながりについて考えさせる。 百人一首の中で「月」が詠まれている和歌にどんな歌があったか説明する。	二首の和歌の歌意を説明する。 「天の原」の歌は、歌の詠まれた背景も説明する。 三首のそれぞれのテーマは何であったか、質問する。 三首に共通している点を探すよう指示する。	指導者	二年必修札より、「秋風にたなびく雲の絶え間より」「天の原ふりさけ見れば春日なる」「朝ぼらけ有明の月と見るまで下」の二首を学習する。二首を確認する。	月を詠んだ和歌二首の理解と鑑賞（本時三時間目）	一時間目 二時～三時間目 四時間目 五時～九時間目 十時間目 十一時間目	「関心・意欲・態度」…積極的に考えたり、発言したりすることができたか。 「読む力」…和歌の調子を整えて読むことができたか。 「知識・理解」…各歌の大意や歌人の心情を理解することができたか。	「音読や暗唱を通して、和歌に親しむ。」 ・表現上の特色に注意しながら和歌を味わわせる。 ・枕詞、序詞、掛詞、縁語、比喩などの修辭法の働きを理解させる。	和歌の世界	「教科書名」 「教材名」	千田 加代子		
	短歌を創作することを意識する。	教師の話を聞く。 二首の和歌の音読をする。	説明を聞きながら、歌意を理解する。（たなびく月の影、天の原、朝ぼらけ、有明の月などの語句の意味を理解する。） 二首、それぞれについての歌のテーマを考え、書く。 二首とも月が詠み込まれていることに気づく。 一・二年で学習した和歌の想起	学習者	教師の詠みを聞き、取り札を取る。 二首を全員で音読する。	月を詠んだ和歌二首の理解と鑑賞（本時三時間目）	一時間目 二時～三時間目 四時間目 五時～九時間目 十時間目 十一時間目	「関心・意欲・態度」…積極的に考えたり、発言したりすることができたか。 「読む力」…和歌の調子を整えて読むことができたか。 「知識・理解」…各歌の大意や歌人の心情を理解することができたか。	「音読や暗唱を通して、和歌に親しむ。」 ・表現上の特色に注意しながら和歌を味わわせる。 ・枕詞、序詞、掛詞、縁語、比喩などの修辭法の働きを理解させる。	和歌の世界	「教科書名」 「教材名」	千田 加代子		
		それぞれに考え、書く事ができたか。 じっくり聞いているか。 意味を考え、調子を整えて音読することができたか。	真剣に聞けたか。 （空欄補充できたか。） 自分なりに考えて、書けたか。 月という共通点に気づいたか。 それぞれに考え、書く事ができたか。	評価方法	・積極的に取り組めたか。 ・上の句で取れる札が何枚あったか？ （二枚以上は上の句で取れるように。）	月を詠んだ和歌二首の理解と鑑賞（本時三時間目）	一時間目 二時～三時間目 四時間目 五時～九時間目 十時間目 十一時間目	「関心・意欲・態度」…積極的に考えたり、発言したりすることができたか。 「読む力」…和歌の調子を整えて読むことができたか。 「知識・理解」…各歌の大意や歌人の心情を理解することができたか。	「音読や暗唱を通して、和歌に親しむ。」 ・表現上の特色に注意しながら和歌を味わわせる。 ・枕詞、序詞、掛詞、縁語、比喩などの修辭法の働きを理解させる。	和歌の世界	「教科書名」 「教材名」	千田 加代子		

小倉百人一首プリント

(クラス) 番号 氏名

七九 秋風にたなびく雲のたえ間より

もれいづる月の影のさやけさ

左京大夫顯輔

(歌意) 秋風によってたなびいている雲の切れ間からこぼれてくる月の()のすがすがしく清らかなことよ。

(語句) たなびく・・・

影・・・・・

さやけさ・・・

(主旨)

七 天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山にいでし月かも

安部 仲麿

(歌意) 天空をはるかにふりあおぐと、(月がのぼっている。ああ、あの月は)春日()の三笠の山に、かつてのぼっていた月だったのだなあ。

(語句) 天の原・・・

春日なる・・

(作者について)

古今集には「唐で学問していた仲麿は、なかなか帰国できなかつたのだが、いよいよ遣唐使とともに買えることになって、明州で人々が別れの宴を張ってくれた。その時に月が上ってきたのを見て詠んだと語り伝えられている。」とある。仲麿が唐の地を踏んだのは十七歳の時であった。天平勝宝五年(七五三年、五十六歳の時遣唐大使藤原清河に従って帰国しようとした。帰国を前にした送別の宴で、はるか昔の青年時代、故郷の奈良でながめた月、また渡唐にあたって催してくれた送別の宴を思い浮かべたのであろう。遣唐使の一行は日本をたつ前に、春日の山で神に祈る習慣もあったという。

(主旨)

三二 朝ぼらけ 有明の月と見るまでに

吉野の里に降れる白雪

坂上 是則

(歌意) ほのぼのと夜が明けるところ、また空に残っている月の光が差しているかと思ふほどに、しらじらと、吉野の里に降り敷いている白雪を

(語句) 朝ぼらけ・・・

有明の月・・・

(主旨)

☆月で連想するもの()

☆百人一首では月が詠まれている和歌が多くありますが、昔の人たちにとっての月とは、

Blank box for student response to the moon-themed question.

☆好きな和歌を選び、感想を書いてみよう。

選んだ和歌の番号()

感想

Blank box for student response to the favorite poem question.